

# 「炎の塔」23時

多摩の、巨大なキャンパスが眠る時。

夜11時——閉門。大学の4つの門が閉鎖される。

「炎の塔」はその直前まで、息づいていた。

10時50分、“追い出し”のチャイムで、「後ろ髪を引かれるように」机を離れ、最後の一群が塔から出てくる。

司法試験、ロースクール進学、公認会計士試験、国家公務員試験……をめざす群像。目標への手応え、自信、あるいはいささかの不安。それゆえの研鑽。君よ、眠くはないか。5月某日深夜のひと模様、「炎の中大生」ドキュメントである。

学生記者 滝沢孝祐(総合政策学部3年) 十池内真由(法学部2年) 十有路恵(法学部2年)

夜が深くなった。

すべての学部棟が黒々と闇に沈んでいる。ぼう、と向こうの明るさはCスクエア、サークル棟でしょうね。今宵も、あちらはさぞにぎやかなことだろう。

「炎の塔」正面3階のステンドグラスがくつきりと浮かびあがって見える。タテ・ヨコ2・57メートル。もとは駿河台の旧図書館(昭和5年竣工)の天窗にあった。ジャーナリストの先人、長谷川如是閑らもふり仰いだらう多くの由緒を継いで、そっくり移設された。

光彩あざやかな光の集合が、全体にオレンジ系の色調をつくりだしている。外から見上げると——「炎の塔」の「炎」のように見えてきた。イレコミすぎか。

## 愛想のいい人悪い人

10 PM 3人は取材にとりかかった。塔の中はまだ宵の口である。各研究室ともまだかなりの数の学生が机について励んでいる。静かだ。

学生数人が研究室から出て、会話を楽しんでいる。「学生記者」の腕章をつけて、池内が1人に「あのー」

と声をかけたのとたん、「終電なので……」と軽く拒否されてしまった。

うむ、先が思いやられる。

10・30 PM 「きょうは民法総則しか(勉強)してないよー」という男子学生。近づくと「帰るぞ」と逃げられました。

外では、滝沢と有路も似たような出来事。

10・15 PM 塔から出てきた男女2人連れ。1人が「電気ポット」をもつて駆けだした。追いかけると、さらに足早になってキャンパスの闇へ消えた……。不審者とも思われたのだろうか。しかし、あのポットは何用あって、だったのか。

もちろん、みんながこうだったわけではない。友だち同士やカップルふうに楽しげに出てくる人、ひとりで黙々と出てくる人、終電を急ぐ人、アイソのいい人悪い人……以下、名前があつたりなかったり、研究室名も不明が多いけれど、もともと「口がカタイ」面々への立ち話の「街頭インタビュー」である。不揃いなのは、お許しいただきたい。

《「炎の塔」は創立125周年事業の1つとして02年7月完成



ステンドグラスから光がもれる

ある》

### 勉強のために何かを捨てる

10:08 pm 2人組みの女性が出て

きた。話が聞けそうである。脇山妙子さん(法・法2年)と、松村さん(法・政2年)。

——めざす目標は？

脇 「司法試験です。女性として自立していくために、法曹の道に進みたい。『人に優しくしたい』という思いが根底にあるのですが、そのためには自分が強くならなければ、社

会的な力を持たなければいけないと思ったのです」

松 「海外に行つて、アメリカの弁護士資格を取つて、価値観の違う人と人をつなげる仕事をしたいです」

——研究室以外に部活やサークルは？

脇 「空手です」

へえ。「落差」がすごいけれど、「強くなるために」では、共通しませぬえ？

松 「私は馬術です」

カッコいい。

——勉強で、やりたいことができなくなつたりすることは？

松 「犠牲になることはありませんね」

脇 「炎の塔で司法試験を目指して勉強することは、ある意味で生き方を限定することになると思います。なにかを決めるということは、なにかを捨てることですから」

——具体的には、何を捨てていると思いますか？

脇 「映画を見る時間ですかね」

松 「ぼく〜つとする時間とか。ハハハ」

——気持ちよく、ちょっと長話ができた。

10:21 pm 真法会2年という五十

嵐沙織さん(法・法)と、歩きながら

——いつも、これくらいの時間まで勉強しているのですか？

「そうですね。これくらいの時間になりますね」

——帰るの怖くない？ 家は？

「多摩センターです」

——目標は弁護士？

「ええ、弁護士は小さい頃からの夢なんです。話すとき長いからこんな感じで……」

もうすこし食いだがる。

——疲れるときとか、何をしているの？

「なんか、気づくといつもここ(炎の塔)にいます。大学受験に後悔があるので、今度こそ後悔はしたくないんです。ていうか、勉強できない時間があるとキリキリしてしまっんです。もつたない……みたいな」

——研究室はどんな感じ？

「そうですね……うわさとか広がるの早いですよ」

——例えば？ 恋愛ネタとか？

「う〜ん、確かに。彼氏ができたとか。あつ、私には関係ないですよ」

「来年の現行司法試験に合格します！」

## ロースクールを視野に

10・23 PM 気さくでやさしそうな若松佑宜さん（4年）。

「昨年の択一試験に落ちて、ロースクールを視野に入れて勉強中です。予備校に通っていたのですが、半年前にやめました。中学時代に覚せい

剤の公判を傍聴して、そのときの裁判長が被告が更正できるようお願いもつて接していたのに感動しました。単に善悪を判断する存在、というイメージが払拭されて、自分もこの職業しかないと。ここは週1〜2回利用しています」

10・31 PM 古屋さん（3年）は色黒でさわやか。高校時代から弁護士

士の夢。テニススクールでも週1参加している。「もちろん、受からなかったらどうしよう、という不安はありませんよ。他の人が自分より勉強しているのがそれがプレッシャーにもなりますね。ゼミの議論の場などで、理論的に自分の意見を述べられたりするとやりがいを感じます」

「彼女がいないので、もっと出会いがほしいなあ」とつぶやいた。側を、足早に男性が通りすぎる。

——ちよつと話を。

「あつ、ええ……」。何をめざしているんですか？「会計系の資格です」。公認会計士とか？「そんな感じです」。税理士？「は、はい」。上の空で立ち去った。

## 先輩指導、「答練」、写経

### 中大・学研連伝説

「炎の塔」は、空調完備。入会すれば、それぞれに定席（机）とロッカーもある。「恵まれすぎだよ」とは言わぬまでも、OBには隔世の思いがするらしい。

この4月、中大卒の「第一東京弁護士会会長」が誕生した。奈良道博弁護士、70年法・法卒である。在学中は瑞法会に所属した。

「当時は学園紛争の真っただ中で、大学封鎖のロックアウトなどもあった時代です。水道橋にあった校舎を5研連（当時）の研究棟にして、毎日朝9時から夜11時まで、青春をカンプメにして勉強しました。ポロ校舎でコンクリートのたたきの上ですから、夏はハダカ、冬は石油ストーブがあるが寒い。みな腰に毛布を巻き、はんでん・ちゃんちゃんこをひつか

ぶつてやってましたよ。声をかけるのをためらう、それこそメラメラと炎がもえあがるような先輩・同僚の姿を見ながら、がんばったんですね」

司法研修所が当時は湯島にあって、合格組の先輩がよく訪れた。先輩が後輩の面倒をみる、とことん指導する。これが、どこにもない「中大学研連」の伝統であつたらしい。

それに、「答練（答案練習）」。これも中大が誇る実践的強化法だった。東大や早大など他大生もやってきて「対外答練」。毎週日曜日、5〜600人が参加したそうだ。本番の試験と同じく各教科2回の論文試験があり、採点、添削、順位発表。講評を受けて、相互の議論。

「まるで『写経』だったなあ」と語るのは福原紀彦・法科大学院教授である。研究者の道へ進んだが、奈良氏の2年後輩、現瑞法会会長をとめる。

「先生や先輩の書いた模範答案を、学生がガリを切つて印刷する。一字一字書き写すのだから、ああこう書けばいいのか、と勉強になりました。いまの学生はコピーと蛍光ペンでしょう。昔の『写経』のような作業



塔の中の談話室も夜までこの光景

で得るところとはやはり違うでしょうねえ」

力がつくわけである。

## 「20年連続日本1」生んだ 「ミニ・ロースクール」

法職事務室がまとめた資料によると、1951（昭和26）年から70（昭和45）年までじつに20年間、しかも



「ちょっと話を……」。深夜のインタビュー

合格者のうち学研連出身者がほぼ7割以上を占めたといわれる。たとえば真法会は、66（昭和41）年、当時最終合格者500人の中に、準会員を含めて41人を送り出し、72（昭和47）年には中大の合格者総数1000人のうち52人を輩出した。そんな伝説的なミニ・真法会でも、いまでは「答練」は行われていないという。塾や

連続で、OBを含む中大勢が司法試験最終合格者数で東大を凌いで全国トップ、東大・赤門に対して「白門・中央」の名をほしいままにした。

奈良氏の司法試験突破は卒業翌年の71年だったそうだ。

その年、総数で東大に抜かれ2位に甘んじた。振り返ると「ターニングポイントの年」ともいえるが、その後もしばらくは東大と日本1を競い合う時代が続き、73年、81年にはトップを奪還している。

予備校ができたせいも大きい。そんな時代の変化がある。多摩移転後、先輩の指導体制も昔のようにはいかなくなつたとはいえ、「OBとのつながりはアツイですよ」と、田野剛広さん（04年法・法卒）は話す。元真法会委員長、今春から中大職員。

「入室式、入会式、卒業生歓送会、合宿は代々の習わしです。昔は都心のホテルで大々的に行われ、座禅会をやった年もある、と聞いています」そして、こんなエピソード。「ロースクール開設時、合同説明会に行つたのですが、成蹊大学法科大学院と明治大学法科大学院のブースで、説明の担当教員が『中大真法会のようなロースクールにしたいんですよ』とおっしゃった。真法会所属であることなどむろん話していません。とても印象的で、感激しながら、会の重みを再認識しました」

先輩・後輩の緊密なサポート体制、それが生み出した「答練」という独特のシステムは、そのまま「ミニ・ロースクール」を体現していた、といえるかもしれない。

## ウワサも広がる狭いところ

10…35歳 仲の良さそうな男性と女性。

—— ちょっといいですか？

男・女「はい」

斉藤亮太さん（法・法2年）と佐藤木梢さん（法・法2年）。

—— もしかしてカップル？

佐「まさか、違いますよ」

斉「学部のクラスが同じなんです。25人のクラスで7人ぐらい研究室に入ってますよ」

—— サークルとかやってるの？

佐「はい、スキーサークルです」

—— 両立は大変じゃない？

佐「切り替えのタイミングを決めているので。夏に短期留学するので、それまでは勉強しようと思っただけです」

—— 炎の塔って、どんな世界なの？

斉「狭い世界ですよ。友だちの友だちって考えれば、たぶん同じ学年は全て知っているんじゃないかな」

「ぼつとウワサが広まる」狭い世界。そのうち消える愛もあれば、「炎」と燃える愛もあるだろう。インタ



洗面所には「常客」の歯ブラシもあった

「ええ、部屋では机を並べてましてね。外へ行きもせず、ずっと一緒ですからね。同じ目的に向かって、同じ釜の飯を食った連帯感、というのかな。教え合ったり、励まし合ったりするうちに、そういうことになりました」

### 現役合格組が指導

10…40 pm 懐中電灯を片手に警備員が現れる。記者たちを一瞥して、炎の塔の中へ。

10…40 pm 3年次に現役合格の男性と出会った。名前は秘して、Aさん（4年）。

「ええ、後輩の指導にあたっています」

よき伝統はこんなかたちで残っている。

「1年生から研究室に入会しました。サークル経験なし。横道にそれたことはなかったですね。といって別段弁護士が特別だとは思わない。あくまで資格のひとつとしてめざしました。ええ、彼女はいますよ」

10時50分 「まもなく、閉門の時間です……」。学内アナウンスに

合わせてチャイムが鳴った。ぞろぞろと最後の一群が塔から出てきた。ざっと、5、60人といったところか。

女性A。1年生。「ええ、まだ、入室2日目なんです」。きょうはどんな勉強を？「民法の心裡留保とか、そんなところを」

先輩と思われる男性が寄ってきて、記者のメモをのぞきこむ。

「炎の塔」は燃えているかと、深夜取材です。

たばこをくわえて笑いながら、「燃えている、燃えている。ハハハ。終電なくなるから、そんなのいいから帰るぞー」と女性に。1年生「すみません」と会釈してサヨナラ。

男性B。真法会の4年生。「最難関試験である司法試験突破、ということ自体に魅力を感じて、脇道にそれることなくやってきた。毎日、この時間まで利用してますよ。土日、関係ないですね」

関係ないですね」



最後の一群——「炎の塔」雨情（これは他日撮影）

ビューでもけっこうその話が出たように。インタビュアーがことさら話を向けたせいもあるのだけれど。

「炎の塔」はまだ4年目。何組もこの愛が成熟するまでにはまだ日が浅いともいえるが、「研究会仲間結婚した人は何人もいますよ。中大法曹会のそうそうたる顔ぶれの中にも」と、あるOB。

何を隠そう、奈良・第一東京弁護士会長もその1人である。夫人は奈良ルネ弁護士。同じ瑞法会1年後輩で、司法試験合格も1年後の72年。結婚は翌73年だったそうだ。

かつては、入会したら司法試験をめざして一直線だったが、いまは一発試験の現行司法試験をめざすか、法科大学院へ進んで新司法試験か。受験生たちは、「両にらみ」の苦渋も抱えている。法科大学院↓新司法試験への完全移行は2011年度。それまで、過渡期特有の課題を抱えたまま、学研連も「司法試験受験団体」から離脱してどう方向付けしていくか、新たな模索を迫られている。

司法試験と公認会計士試験（2次）の最近3年間の中大勢（OBを含む）合格者は次のようだ。

- ▽03年度104人（全国5位）
  - ▽04年度121人（5位）
  - ▽05年度122人（4位）
- 公認会計士試験
- ▽03年度76人（4位）
  - ▽04年度76人（4位）
  - ▽05年度108人（4位）

### 「しりに火がついた」

10:52pm 5月に現行司法試験の択一式を受けた男子2人組み。ともに、法・法3年、多摩研究室。

結城「もう最近では精神的にぼろぼろですよ！」

そう言いつつもここにこと話す。

——手応えは？

結城「こいつは受かるんじゃないですかー」

そう言って相手の肩をたたく。

AH「んー。（首を傾げて）ただ

研究室には年間350日は足を運ん

めますよ。正月も、クリスマスも。

今年もそうなるかもしれない(笑)」

ステキな笑顔をつくり家路へ。

10:55pm チェックのシャツに、

破れジーパン姿。話しやすい感じ

の男性をつかまえた。長浜有平さん

（法・法）だった。済美会所属。

「尻に火がついたのは去年落ち

てからですよ。うん、いまの時期

は朝8時の開門から閉門まで。自販

機のカップラーメンやパンなんかを

食べながら、がんばっています。種

類が少ないから、もう飽きちゃった

よ。野菜が少ないからからかなあ、

ちよつと風邪がみです」

択一式試験の結果発表は6月8日

と、目前に控えていた。それをパス

すれば7月半ばに論文試験が待って

いる。中大法科大学院試験は8月下旬。

「現行試験と並行して、法科大学院も受験します。先輩が言うには、

『体調を崩さないでいどに、無理し

てがんばれ』と。バイクで堀之内に

帰って、きょうも2時か3時まで、

やりますよ。眠くない？ そりゃ眠

いけど、バッグの中には、ほら、眠

気覚まし用のミントガムが常備品」

6月8日、パ

スしました」と

長浜さんから弾

んだメールが届

いた。よかった。

法科大学院2

年既修者コース

修了者の、初の

新司法試験の合

格発表は9月21

日である。ピッ

グ・ロースクー

ル同士の東大を、

数でしのいで、

中大の「古豪復

活」は成るだろ

うか。

——ペデ下に、

コッコツと記者



そして、人影も、足音も消えた

3人の足音だけが響く。光のラインに縁どられた、矩形のデッキが、ドレッシングルームからリングへ向かうボクサーの花道のようにも見えてくる。その先のリング上で、栄光はほほ笑むだろうか。

11時を回って、キャンパスは深ぶかと沈黙し、眠りにつこうとしていた。